

学位請求論文（博士）の概要

提出者：倉林秀男

題目：言語学的文体論からみるアーネスト・ヘミングウェイの文章構成原理の探求

Linguistic Stylistics: Its Development and Application to the Craft of Ernest Hemingway's Prose Style

【目的・意義】

本論文の目的は、今日の言語学の成果を利用して、文学テキストを材料として分析を行うことで、そのテキストの構成原理およびテキストの解釈を導き出し、文学研究に言語学の知見を活用することができることを提示するものである。具体的にはノーベル賞作家であるアーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway, 1899-1961) の作品を取り上げ、様々な言語学理論を援用しながら分析をし、ヘミングウェイの文章構成原理について考察を行った。特に、意味論や語用論だけではなく、近年の認知言語学の知見を援用することで、これまで文学研究や物語論研究で論じられてきた観点とは異なった面から議論を進めた。

例えば、「視点」という用語は文学研究、物語論研究、言語学の領域でも用いられているのだが、その意味や考え方がそれぞれの領域で異なっている。文学研究や物語論での「視点」は小説内の語りがどのようなパースペクティブで語るのかという点に関心がある。一方、言語学の「視点」研究はテキストや文の構成を制約する機能を有する、いわゆる文法的な因子であるという前提に立っている。そこで、本研究においては、言語学寄りの立場に立ち、視点はテキストを制約する因子であると考え、その記述の仕組みを「文体」と捉え直し分析を行う。加えて、語用論の会話分析の研究についても、文学テキスト内の会話分析にも有効であることも示した。

具体的には認知言語学的観点から、Lakoff and Johnson (1980)のメタファー論を援用し、詩の分析を行い、認知言語学のメタファー論でも文学作品を分析できることを示した。そして本論文の主要な論点である、言語学的な観点から文学作品にアプローチするものとして、久野暁 (1978)、澤田治美 (1993)、池上嘉彦 (2006)、Halliday and Hasan (1976) の機能主義的な立場に立った文法論、意味論、P. Grice (1989) や Brown and Levinson (1987) による会話分析研究の観点からヘミングウェイの複数の作品分析を行った。これまでの先行研究ではヘミングウェイの作品を言語学的に分析することはあったが、ヘミングウェイがいかにして文体を確立していったのかという点について、多くの作品を同時に並べて論じられることはなかった。そこで、本論文はヘミングウェイの文章構成原理について、高校時代の習作から初期の短編、晩年の長編を並べ、言語学的

な知見を援用することでその構成原理を明らかにすることで言語学的な分析の意義を提示したのである。

【ヘミングウェイ作品における「ハードボイルド」、「曖昧」の再考】

ヘミングウェイの作品を「ハードボイルド」や「曖昧」と論じられてくるとはこれまでも多くの研究成果が示している。しかし、文学研究においてヘミングウェイのスタイルを論じる際には、この点に関する検証はあまりなされてこなかった。加えて、こうした評価を無批判的にヘミングウェイの文体であると考えてきた。したがって、ヘミングウェイの文体について客観的に検討する必要性があり、語用論や意味論による考察の必要性を提示した。

文学研究におけるヘミングウェイのスタイルに関する様々な言説は、主観的な評価が一人歩きし、文体というより、作品の主題やプロット、さらには、その人生をもひとまとまりに捉え、ヘミングウェイを修飾する曖昧模糊とした雰囲気として考えられている。そこで詳細な分析を行っていくと、ハードボイルド言説に隠されていた、ヘミングウェイの巧みな心理描写の技法や、意図的に曖昧性を生じさせる技法を駆使し創作していたことが明らかとなったのである。

ヘミングウェイの心理描写のメカニズムであるが、まずは登場人物の「知覚／感覚を表す表現」が用いられた後に、登場人物の意識の内奥に迫る形式がヘミングウェイの作品の多くにみられることを明らかにした。そして、この形式がヘミングウェイのスタイルの特徴のひとつであることを示した。

また、ヘミングウェイの描き出す作品世界の曖昧性についても再考を行った。物語世界へと読者を引き込む機能の一つとして作品内で曖昧性を残したまま物語を終えることで、余韻を残す。例えば、「マニトウーの裁き」の結末部分は自殺と読み取ることができるが、作品は「ライフルに手を伸ばした」と結ばれる。ライフルに手を伸ばしただけでは、実際に手に取ったかどうかわからない。こうした物語の結末の曖昧性が高校時代の作品に見られ、その後のヘミングウェイの文体形成の源流となっていることを示した。

一般的に文学作品の曖昧性というものは、解釈の際にさまざまな可能性を持ち、もしくは、決定的な解釈の根拠を失った状態になったときに生じるものである。本論文では、文章の隙間を読み取るということは極力避け、そこに書かれた文字を頼りに、言語学的手法を使って読み解いてみた。そのためには作品内に用いられている表現形式を（言）語学的に徹底的に読むという作業が必要であった。これは、ウィリアム・エンプソンやI.A.リチャーズたちがかつて行ったクローズ・リーディングと重なるところがあるかもしれない。しかしながら、クローズ・リーディングと異なる点は、今日では、発展著しい言語学研究成果を有効な分析手段として利用できることである。例えば、本論文で取り

上げた Kamio and Thomas (1999)などが代表的なものである。Kamio and Thomas は、これまで機能語として考えられてきた *it* と *that* という語について語用論の立場から論じ、その語の役割や仕組みを明示的に示してくれている。こうした語用論の知見を援用することで、これまで曖昧であると指摘されてきた作品を改めて論じることができた。特に、ヘミングウェイが意図的に *it* や *that* の指示対象をテキスト内で明確にせず作品を描き出し、曖昧性を作り出していることがわかった。こうした一連の分析を提示することにより、言語学の観点から文学作品の言語を分析すること、すなわち言語学的文体論研究は、これまで直感によることの大きかった文学作品の読みの精度を向上させる一つの有効な手段となり得るものであるという事例のあることを示すことができたはずである。

そして、ヘミングウェイ作品のスタイルの特徴となる心理描写や曖昧性の源流を探るために高校時代の創作活動期の作品を取り上げて、ヘミングウェイの文体がどのように形成されたか考察した。その結論として、ヘミングウェイのスタイルは彼がフランスでの作家生活に入る前からある程度形作られていたということを示すことができた。アメリカのオークパークでの高校時代に校内の文芸誌に掲載されたヘミングウェイの三つの短編、その後アメリカでの新聞記者の経験や創作活動を行っていた修業時代にその後の文体の源流が明らかに見受けられた。

初期短編群にはヘミングウェイの得意とする端的な表現に加え、その後の作品にも影響を及ぼし続けることになる、登場人物の意識の描写の技法の萌芽がこの時期の作品に確認することができた。このように、高校時代の作品から捉え直すことで、この時期における創作活動がその後の創作に影響を与えているということを明らかにすることができたのは重要な意味を持っていると考えられる。これで、作家の文章構成原理の萌芽を習作期に認め、その後の作品にまで通底する構成原理のひとつを明らかにできた。そして、これまでヘミングウェイ研究のなかで見落とされてきた、高校時代の習作に焦点を当てて論じたことは、ヘミングウェイの文体形成がパリ時代にあったというこれまでの通説に対し、パリ時代よりも前のアメリカでの習作時代にあったという独自の視点からの論を展開することができた。

こうしたヘミングウェイの文体形成の原理だけではなく、作品の読み、すなわち作品解釈を言語学的な観点から分析することで導き出すことができるということも示した。特に、定冠詞の *the* や 不定冠詞の *a* によって描出される名詞句に注目すると、物語内で前景化させるべきところには不定冠詞による描写が用いられ、最終的には物語全体の解釈へとつながる可能性があるということ、『誰がために鐘は鳴る』を分析していく中で示した。

また、語用論の領域で論じられてきた会話分析やポライトネスの概念を援用

することで、文学テキストの分析をし、意識の流れの描写やテキスト内の時制について焦点を当て、「フランシス・マカンバーの短い幸福な生涯」の解釈へと迫り、作品内における意識の描写の技法と曖昧性を生み出す技法が巧みに織り交ぜられた作品であることを示した。

【むすび】

本論文の主張は言語学が文学研究よりも優れた学問であるということを描き出すことではなく、さらに、言語学的分析が、これまで文学研究で培ってきた批評理論に基づいた読みを排除するものではない。テキストの正確な理解は言語学的な観点からによって行われることで、客観的にテキストの言語表現を記述することができることを提示するものである。作品の解釈については、文学的な伝統に従った解釈も可能であれば、語用論的な推論による解釈も可能であるということを示した。そして本論文の目的である「言語学的文体論とは文学テキストを徹底的に言語学的に分析し、作品内での表現の効果や作家個人の文章構成原理を解明する学問である」と示すことができたはずである。

Works Cited

- Brown, Penelope, and Stephen C. Levinson. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge UP, 1987.
- Grice, H. P. *Studies in the Way of Words*. Harvard UP, 1989.
- Halliday, M. A. K., and Ruqaiya Hasan. *Cohesion in English*. London: Longman, 1976.
- Kamio, A and M. Thomas. "Some Referential Properties of English It and That." Kamio, A and K. Takami eds. *Function and Structure*. John Benjamins, 1999.
- Lakoff, George, and Mark Johnson. *Metaphors We Live By*. U of Chicago P, 1980.
- 池上嘉彦『英語の感覚・日本語の感覚』、NHK ブックス、2006年。
- 久野暲『談話の文法』、大修館書店、1978年。
- 佐藤勉『語りの魔術師たち：英米文学の物語研究』、彩流社、2009年。
- 澤田治美『視点と主観性』、ひつじ書房、1993年。
- 四宮満『アーサー王の死：トマス・マロリーの作品構造と文体』、法政大学出版局、1991年。
- 府川謹也、「it と that の指示特性について」、『英語研究』、第56号、獨協大学、2002年、71-110ページ。